

2024 年 9 月 9 日

各 位

仙台市青葉区一番町二丁目 1 番 1 号
株式会社 仙 台 銀 行

仙台銀行ホール イズミティ 2 1 コンサートシリーズへの協賛について
～イズミノオト 第 10 回 百花繚乱ノ巴里～

株式会社仙台銀行（本店 仙台市 頭取 坂爪 敏雄）は、仙台銀行ホール イズミティ 2 1 にて下記のとおり開催されるコンサートへ協賛しますのでお知らせいたします。

当行は、今後も仙台市と連携を図りながら、地域の皆さまの文化活動への支援を通じて、地域活性化に貢献してまいります。

記

1. 開催日時

2024 年 11 月 17 日（日） 開演 15：00（開場 14：30）

2. 会場

仙台銀行ホール イズミティ 2 1 小ホール

3. 入場料

全席指定 3,000 円（市民文化事業団友の会料金 2,700 円）・未就学児入場不可

2024 年 9 月 11 日（水）一般発売

4. 各種お問い合わせ先

（1）チケットについて

仙台市市民文化事業団 総務課 TEL：022-727-1875（平日 9：30～17：00）

（2）公演について

仙台銀行ホール イズミティ 2 1 TEL：022-375-3101（9：30～19：30 休館日を除く）

以 上

じもとグループは
SDGsに賛同しています



問い合わせ先
経営企画課 中島・高橋
電話：022-225-8258

仙台銀行ホール イズミティ 21 コンサートシリーズ
イズミノオト 第10回 百花繚乱ノ巴里

フルート
瀧本 実里

オーボエ
高橋 鐘汰

クラリネット
下路 詞子

ファゴット
西口 真央

ホルン
庄司 雄大

2024
11 / 17 (日)

「開演」午後3時(開場午後2時30分)

「会場」仙台銀行ホール イズミティ 21 小ホール

(仙台市営地下鉄泉中央駅北3出口よりすぐ)

「入場料」全席指定 3,000円

(市民文化事業団友の会料金 2,700円)

※未就学児はご入場いただけません

2024年9月11日(水)一般発売

コーディネーター 吉岡 知広
(仙台フィルハーモニー管弦楽団首席チェロ奏者)

Darius Milhaud/André Jolivet/Claude Debussy/Jean Françaix

「プレイガイド」仙台銀行ホール イズミティ 21、日立システムズホール仙台、仙台市市民文化事業団ウェブサイト(<https://ssbj.jp/>)、藤崎、ローソンチケット(Lコード:25502)

「チケットに関するお問い合わせ」仙台市市民文化事業団 総務課 TEL:022-727-1875(平日9:30 ~ 17:00)

「公演に関するお問い合わせ」仙台銀行ホール イズミティ 21 TEL:022-375-3101(9:30 ~ 19:30 休館日を除く)

「主催」公益財団法人仙台市市民文化事業団、khh東日本放送 「企画制作」仙台銀行ホール イズミティ 21、HAL PLANNING

「後援」公益財団法人仙台フィルハーモニー管弦楽団 「協賛」仙台銀行、宝来産業

「プログラム」

ミヨールネ王の暖炉

ジヨリヴェ・セレナーデ

ドビュッシー・小組曲

フランス・木管五重奏曲 第1番



Facebook情報

仙台銀行ホール イズミティ 21 コンサートシリーズ
Facebook公式ファンクラブ イズミノオトモダチ

コンサートに関する情報など発信していきます。ぜひ“いいね!”してください。

URL: <https://www.facebook.com/izuminootomodachi/>



仙台銀行は、コンサートシリーズ「イズミノオト」への協賛を通して、地域の文化活動を支援しています。



瀧本 実里 フルート

©Makoto Kamiya

栃木県出身。東京音楽大学を卒業。フルートを坂本しのぶ氏、工藤重典氏に師事。日本音楽コンクール、東京音楽コンクール、びわ湖国際フルートコンクール他、様々なコンクールで優勝。2018年度RMF奨学生。これまでに東京フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団と共演。NHK-FM『リサイタル・パッショ』に出演。

百花繚乱ノ巴里

イズミノオト 第10回

仙台銀行ホール イズミティ21 コンサートシリーズ



高橋 鐘汰 オーボエ

カールスルーエ音楽大学を経て、フライブルク音楽大学大学院に進学。現在、仙台フィルハーモニー管弦楽団オーボエ奏者。これまでに高山郁子、T.インデアミュール、P.トーンデュールの各氏に師事。第12回国際オーボエコンクール・東京奨励賞、第71回プラハの春 国際音楽コンクール審査員特別賞受賞、第19回キエリ国際音楽コンクール最高位入賞等、国内外のコンクールで多数受賞。



下路 詞子 クラリネット

© Ayane Shindo

東京都出身。東京藝術大学音楽学部を同声会賞を得て卒業。同大学院修了。2015年より仙台フィルハーモニー管弦楽団クラリネット奏者。宮城学院女子大学非常勤講師。これまでにクラリネットを、矢野裕子、三倉麻実、山本正治、伊藤圭、パトリック・メシーナの各氏に師事。現在は全国各地でのオーケストラ、室内楽奏者としての活動のほか、後進への指導も積極的に行っている。



西口 真央 ファゴット

神奈川県立弥栄高等学校音楽専攻を経て東京藝術大学卒業。卒業時に同声会賞を受賞。桐朋オーケストラ・アカデミー修了。第2回K木管コンクールにてグランプリ第2位(1位なし)、及び大学生ファゴット部門第1位受賞。第2回ファゴットコンクール第1位受賞。小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトXVIに参加。現在、仙台フィルハーモニー管弦楽団ファゴット首席奏者。



庄司 雄大 ホルン

宮城県仙台市出身。東京藝術大学卒業。第3回日本ホルンコンクール第2位。第86回日本音楽コンクールホルン部門第2位。第35回日本管打楽器コンクールホルン部門第1位。藝大フィルハーモニア管弦楽団 首席ホルン奏者を経て、現在、NHK交響楽団ホルン奏者。Japan National Orchestra コアメンバー。ホルンアンサンブルHorshメンバー。

コーディネーター 吉岡 知広 (仙台フィルハーモニー管弦楽団首席チェロ奏者)

”百花繚乱ノ巴里”と、
そこに至る道

執筆 野平多美（作曲家・音楽評論家）

19世紀末から20世紀前半にかけて、世界ではさまざまな出来事が起こり、花の都、そして芸術の坩堝のパリにおいてもまさに百花繚乱の様相でした。

今年2024年夏は、パリ・オリンピックでたいそう盛り上がりました。フランスという芸術国家の本領を発揮し、その知性の奥深さを存分に披露した開会式では、多くのクラシック音楽が取り上げられていたのはとても嬉しいことでした。ドビュッシー「牧神の午後への前奏曲」（1894）「ラヴェル」水の戯れ」（1901）、「サティ」ジムノペティ 第1番」（1888）、「サン＝サーンス」死の舞踏（1874）など、ちょうど今回の「イザミノオト」で演奏される曲目と時代的に前後に重なる作品が並びました。

バロック時代のジャン＝フィリップ・ラモー「優雅なインドの国々」（1835）のエリアが、ヴェルサイユ宮殿やロワールに点在する城の庭園をモチーフにした、ブレイキン競技などの初参加を祝うためのセクションで用いられたのも印象的でした。何しろヴェルサイユ宮殿が栄華を誇ったのは、踊りの名手、太陽王ルイ14世の時代に宮廷音楽が盛んだった頃だからです。

ラモーはフランス音楽の祖とも言える作曲家です。音楽語法の基礎を「和声論」（1722）として世界に先駆けてまと

めました。フランスでは後世の作曲家たち、そればかりか演奏家たちもラモーの「エクリチュール」（音楽書式）の伝統の灯火を、まさに聖火リレーのように現在も繋いでいて、今回の「イザミノオト」を彩る作曲家たちももちろんその潮流に乗っています。

この灯火こそが、フランス音楽に一つの大きな流れを作っているのです。

音楽史上、フランス音楽が栄えた二つの時代

実は前述した18世紀のバロック時代と19世紀末からの近現代こそが、フランス音楽において隆盛を極めた2つの黄金時代と言っても過言ではありません。

フランスの古典派時代には大きな特徴もなく、ハイドン・モーツァルト・ベートーヴェンというソナタ形式を極めたドイツ音楽が優勢でしたし、ロマン派時代はフランスではオペラが書けなくては作曲家ではないというムードが高まっていたので作曲家はこぞってオペラを作曲し、器楽曲や管弦楽曲の創作がないがしろにされていたからです。前述の開会式ではオッフェンバック「地獄のオルフエ」（1858）からの一曲とビゼー「カルメン」（1875）のエリアが演奏されました。

ただし、1830年にベルリオーズが「幻想交響曲」というある意味私小説的なフランスの交響曲を世に問うたことは、フランス音楽史上画期的な事柄です。

集う芸術家、音楽家

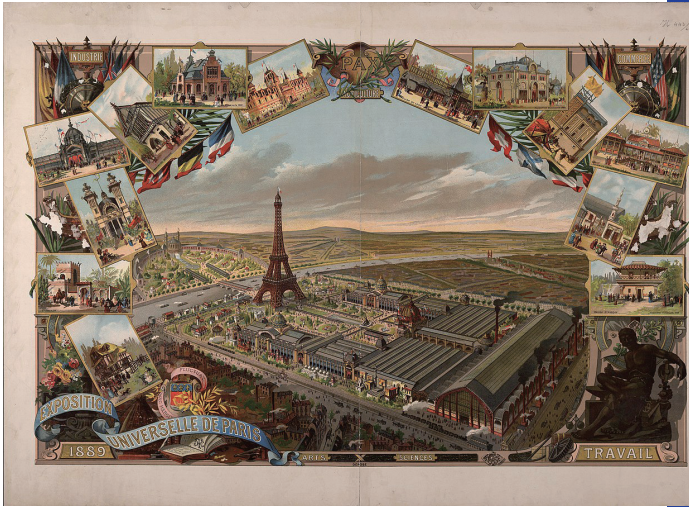
19世紀末のフランスが誇る「サロン文化」は、文学者、哲学者、芸術家がそれぞれ気の合う仲間とぐうして集うことで相互に大きな影響を与え数多の作品を生み出しました。音楽家も会話やお茶時のバックグラウンド・ミュージックに止まらず詩人や文人との交流に着想を受けて歌曲や劇場作品、そして器楽曲やオーケストラ作品を世に問うようになります。そのサロンで産み出されたのが、クロード・ドビュッシー作曲の「小組曲」（四手ピアノ連弾（1888）89）です。友人ポール・ヴェルレーヌの詩集「華やかな宴」（1869）に着想を得て作曲されました。当演奏会ではNHK交響楽団首席奏者の神田寛明氏による、フルーティストならではの細やかな配慮のある編曲版で聴けるのも聴きどころです。

サン＝サーンスらは、フランスの管弦楽曲や器楽作品の発展に寄与しようというスローガンのもと1871年に「国民音楽協会」を創設しました。20世紀初頭には今度は同協会のあまりにもアカデミズム路線でフランスの音楽以外を認めない閉鎖的な思考に反発して、ラヴェルが師匠フォーレを表に出して「独立音楽協会」を設立したのもいかにも良い意味で論争を得意とするフランスらしい対立です。しかしながらこれから二つの協会において、今われわれが耳にする当時の音楽のほとんどが初演されていたことを思えば、音楽史的にとっても有意義なことでした。

芸術にインパクトを与えた当時の出来事

近現代の作曲家には、19世紀末にパリでの万国博覧会がしばしば行われたことも大変大きな影響を与えています。とりわけ1889年のパリ万博こそ、芸術家が強い興味を持つ展示が目白押しでした。エッフェル塔の建設で建築の技術に圧倒され、ジャワ島のガムラン音楽はドビュッシーらに大きなインスピレーションを与えたのです。なお、日本初出品は1867年のパリ万博で、日本の浮世絵などがセンセーションに紹介されました。

一方で、1910年頃、興行師セルゲイ・ディアギレフ率いるロシアバレエ団のパリ公演（ストラヴィンスキーの三大バレエの初演含む）も作品や演出に賛否両論ながらもフランス人芸術家は衝撃を受けました。



1889年のパリ万国博覧会の様子



ダリウス・ミヨー（1892-1974）

その後、第一次世界大戦ではフランスは被害も大きく心身に大打撃を受けました。さらに、第二次世界大戦では文化までもドイツによって支配されるという恐怖も味わい、同じ音楽仲間であったユダヤ人が迫害されるという胸につまされるような出来事を経験して、その間、作曲家たちは傷ついた自らの思いを発散するように創作へと打ち込むのです。

近現代フランスのワイルドな作曲家たち
ミヨー、ジョリヴェ、フンセ

このフランス音楽史の流れを受けながらも、さらに独自の音楽語法を追求した20世紀フランスのワイルド（奔放）型にはまらない作家たちの登場です。

詩人、小説家、評論家ほかマルチな芸術活動を繰り広げたジャン・コクトーを精神的な父とした（フランス六人組（ダリウス・ミヨー、ジョルジュ・オーリック、フランス・プーランク、アルチュール・オネゲル、ジェルメーン・タイユフェール、ルイ・デュレ）の集まりは、1921年に音楽評論家のポール・コレが「ロシア五人組、フランス六人組」という演奏会において命名しました。早熟で子供の頃から詩や音楽に親しんだミヨー（1892）1974）は、生地エクサン・プロヴァンスでヴァイオリンを師事したレオ・ブルギエ氏の弦楽四重奏団の第2奏者を務め、ドビュッシー「弦楽四重奏曲」（1893）を演奏してこの作曲家の虜になりました。なお、1909年にパリ音楽院ヴァイオリン科に入学したミヨーは、1916年12月10日出版社社主のデュラン宅で、1915年作曲のドビュッシー「フルト、ヴィオラ、ハープのためのソナタ」のフランス初演でヴィオラを弾いています。小説「織子の靴」の作者ポール・クロードルが全権大臣を務めるためのブラジル行きに補佐として同行（1917）18）したことは、ミヨーに豊かな創作源泉のバレットを広げさせるきっかけになりました。

カンタータや歌劇の作曲の傍で演劇の付随音楽や映画音楽も多く手掛け、あらゆる音楽のジャンルの作品を生涯作り続けたその数は440曲を超えます。

「ルネ王の暖炉」作品205も、もともととは劇作品のための音楽を7つの小品からなる組曲にまとめました。『暖炉』というのは実は誤訳で、フランス語（La cheminée）は小径le cheminの派生語だと解釈するのが自然であると説く人もいます。中世の時代にエクサン・プロヴァンスに繁栄をもたらした愛すべきルネ王が、自然豊かな当地を散歩する小径という意味を持ち、フランス語では韻を踏む良いタイトル La cheminée du Roi René（ラ・シェニエ・ロワネル）を狙ったといふところもあるようです。

1905年生まれのアンドレ・ジョリヴェは1974年12月20日没で、ミヨーと共に今年没後50年を迎えます。

新しい響きを求める方法を、ジョリヴェはドイツ・ウィーンの手段を用いていることが他の作曲家たちとは異なっています。それは、新しい音階を発想してそれを基にして作曲するか、リズムの反復を利用してその音階を少しずつずらしながら発展させるなどで、聴いているとまるで水の中にボトンと落とした墨が徐々に広がって思いがけない模様を作り出すような感じを受けます。

新しい音階を発想するというのは、オリヴィエ・メシアンも作曲手段の要として用いていたので、ジョリヴェとメシアンが、ジャン・イヴ・ダニエル・ルシール、イヴ・ボードリエと一緒に若きフランスを組織したことも納得できます。

ジョリヴェの「セレナード」（1945）はほとんどオーボエとピアノのためのパリ音楽院卒業試験の課題曲として作曲されました。その後、オーボエをソリストとして、フルート、クラリネット、ファゴット、ホルンと協奏するというコンセプトで木管五重奏に編曲されたのです。

ジャン・フンセ（1912）97）は、新古典主義の作曲家である、とモノの本に書かれていますが、ピアニストとしても活躍し両親とともに音楽家（父が作曲家・ピアニスト、母が声楽家）という恵まれた家庭で育ちであったことは、生まれながらの楽才にさらに磨きをかけたことでしょう。

このような音楽環境の中で育った音楽家が、知りすぎた男として調性に留まることは多いと筆者は感じています。過去の響きの中で個性を模索することに熱中するタイプです。フンセの他には、フランス・プーランク、ジャン＝ミシェル・ダマーズ、アンリ・ソーゲらが挙げられます。

アイディア豊かなフンセが、「木管五重奏曲 第1番」の第1曲では奇妙なワルツやメヌエット、そして第2曲では変奏曲とさまざまな形式を取り混ぜて作曲したこの楽曲は、とても軽妙な語り口で、聴いていると口元が思わず緩んで笑顔になることでしょう。

今回の「イザミノオト」は、フランス音楽の潮流を享受しながらも、それぞれの作曲家が模索した個性的な音響をたっぷり味わっていただけ、とても心惹かれる演奏会です。

お楽しみに！



ジャック＝エミール・ブランシュ
『6人組の面々』(1921年)

※中央はピアニストのマルセル・メイユ。左側、下からタイユフェール、ミヨー、オネゲル。ピアニストのジャン・ヴィエネル。右側、左上がプーランク。隣がジャン・コクトー、下がオーリック。デュレはこの頃すでに6人組から離れていたため描かれていない。



アンドレ・ジョリヴェ（1905-1974）